

# 「刀は日本人の精神の象徴」 名門刀工の伝統と誇りを守り、技を磨く



月山貞利刀匠(本名・清)は、鎌倉時代から続く刀工一族の後裔です。800年の歴史を誇る月山派の伝統を受け継ぎ、多くの名刀を世に送り出しています。名門の直系として作刀に懸ける信念、伝統文化を守る大切さ、そこに現れるものづくりの原点などをお聞きました。

## ■ 連綿と続く刀匠・月山派の系譜

鉄と炎を操る固有の技術を駆使し、強くしなやかな刀身を作り上げる、刀鍛冶の世界。古都ロマンあふれる山の辺の道を歩くと、三輪山のふもとに、静かなたたずまいの「月山日本刀鍛冶道場」があります。刀匠月山貞利さんの工房です。父親の貞一さんが開いた鍛冶場を受け継ぎ、制作と後継者の育成に励んでいます。

月山派は、鎌倉時代から奥州月山を拠点に活躍した刀工の一門です。その名声は松尾芭蕉の「奥の細道」の一節にも記されたほど。幕末に大阪に移り住んだ子孫が新たな活動を展開し、皇室御用刀の制作や貞一さんの人間国宝認定など、輝かしい実績を築いてきました。

しかし、決して順風満帆の道のりだったわけではありません。明治政府の廃刀令により、刀剣が実用品だった時代が終わりを告げ、戦後はGHQによる刀剣没収や、材料である玉鋼(たまはがね)の不足など、文化、芸術としての現代の地位を獲得するまで、苦闘の時代を乗り越えてきました。

大阪工業大では建築学を専攻した貞利さんが本格的に作刀を学び始めたのは、大学卒業後。設計事務所への内定を断り、貞一さんに弟子入りしたのは、「何があっても作刀を続ける父の姿に、伝統文化を守り抜くことの重みを感じたから」と言います。名刀と称賛される流派はほかにも存在しますが、直系の刀工が長く続いているのは月山派のみ。国宝級の名刀を生み出してきた一族の伝統を廃れさせまいと使命感を抱き、後継者となりました。

## ■ 精神修養が優れた技量を育てる

刀鍛冶になるためには、刀匠資格を持つ刀工の下で5年以上の修業を積み、文化庁が主催する研修会を修了する必要があります。現在、刀匠として活躍しているのは、全国に300人ほどいますが、本職にしている人はぐっと少なくなります。作刀需要は、皇室への献上、社寺への奉納、美術館収蔵品や企業の記念品、コレクターの愛蔵品などです。「私が弟子入りした時、父はやはりうれしそうでした。口数

# interview-01

## 月山 清さん

がっさん・きよし ●1969年3月大阪工大建築学科卒。刀匠名は月山貞利(さだとし)。大学卒業後、先代の刀匠・人間国宝 故月山貞一(さだかず)の下で作刀技術を学ぶ。1982年の新作刀展で無鑑査(日本美術刀剣保存協会)に認定。貴乃花、若乃花の横綱昇進時に太刀を贈呈。第62回伊勢神宮式年遷宮御料太刀謹作、全日本刀匠会顧問、奈良県指定無形文化財。大阪府出身。64歳。

の少ない人で、細かく言われることはなかったけれど、私の仕事ぶりをじっと見ていましたね。兄弟子たちと共に学ぶ中、直系であるが故のプレッシャーは強く、常に倍以上の努力をして当たり前と自分に言い聞かせてきたと言います。真っすぐな情熱は形となり、1982年の新作名刀展で刀匠として最高位「無鑑査」の称号を取得。2003年には奈良県指定無形文化財の保持者に認定されました。

黙々とした生き方で示す師・貞一さんに教わったのは、「技術はもちろん人格を磨いてこそ、名刀を生む技量が育つ」ということ。「日本刀には、愛する人を守るお守り刀としての役割があります。心を鍛えて、お守り刀制作にふさわしい人間にならなくてはならないと思うんですよ。工房に「道場」の看板を掲げているのも、弟子たちに精神修養の大切さを伝えたいからだそうです。「若いうちの苦労は買ってでもした方がいい。いずれプラスとなって自分に返ってくるものです。弟子には炭割という仕事があり、1日の終わりには真っ黒になるのですが、『その汚れた姿が尊いのだ。誇りに思いなさい』と話しています」

### ■ハイテクに匹敵する高度な技術

しなやかで折れにくい日本刀には、現代のハイテクに匹敵する高度な技術が盛り込まれており、材料開発などの視点からも注目されています。師匠から弟子への伝承制度も合わせて、ものづくりの原点があると言えます。不純物の少ない砂鉄である玉鋼を原料に、溶解寸前まで加熱(1200℃~1300℃)し、均一な塊にする「積み沸かし」、できた塊を熱し、折り返してたたいていく「折り返し鍛錬」、加熱した刀身を水中で一気に冷ます「焼き入れ」など何段階もの工程を経て、刀身完成までに要する期間は約1年。15回ほどの折り返し鍛錬の結果、約3万3千枚もの層状組織となり、特性の違う素材の組み合わせ、微細な結晶構造によって、「折れず、曲がらず、よく切れる」の3要素を実現した日本刀が完成します。「鋼を打っていると刀の出来栄えが伝わってきます。一番緊張するのは焼き入れです。刀が激しく収縮して、反りと強さが生まれるのですが、一瞬の作業なので、経験と勘がものをいいます。一連の作業を1つでもおろそかにすると、納得できる刀にはならないと言います。地道な作業を積み重ねる工程は、その一つひとつが緊張を強いられる文字通りの「真剣勝負」です。また、月山派の特長として知られるのが、「綾杉肌」と呼ばれる形状。刃に向かって規則的に連なる波状の文様で、研ぎ上げた刀身に浮かび上がる綾杉肌は、格調高く、神秘的な美しさに満

ちています。また、貞利さんの施す刀身彫刻も一層芸術性を高めています。

### ■守るべき文化の価値を伝えたい

このように独特の製法で作り上げられる日本刀は、海外でも美術品として高い評価を得ています。ボストン美術館で開催された「人間国宝展」に貞一さんが出展し、同行した時のこと。オープニングセレモニーで行われた作刀の実演に対する反響の大きさに、「日本刀の芸術に国境はない」と感激したそうです。「しかし、日本人自身が西洋文化に偏重していて、伝統工芸の価値に気付いていないのが残念ですね。鏡・剣・勾玉が三種の神器として伝わっているように、日本刀というのは、日本人の精神を象徴する存在。一部の愛刀家に楽しんでもらうだけでなく、文化として守らなくてはならないものです。広く日本刀の良さを伝えていくことも大切だと考えています」。その責任を果たそうと、1995年に月山歴代の作品や、刀の制作工程を紹介する月山記念館を開館。個展や一門展も国内外で開催して普及に努めています。「若いころは無我夢中で分からなかったけれど、日本人として素晴らしい仕事をさせてもらっているという実感が年々強くなってきました。自分の銘を刻んだ刀身が、数十年、数百年と残っていくわけですから、恥ずかしいものは出せません。明治期に帝室技芸員だった初代貞一は「一生修業」と言っていたのを師(父)からよく聞きましたが、私もまだまだ勉強です」

息子の貞伸さんも貞利さんの下で学び、刀匠として歩み始めました。2005年の新作名刀展では新人賞に輝き、今後の活躍が期待されています。「伝えたいもの」と「伝えてきたもの」。そして「どう生きたいのか」という信念。一振に全身全霊の思いを込めて、父子の歩みは続きます。



山の辺の道にて